【個人研究】

樹木画法の解釈論について
― 樹木心理学の視点から ―

中　園　正　身*

Research in the Interpretation of the Tree Test
― A New Approach to Tree Psychology ―

Masami　NAKAZONO

Summary

The purpose of this study is to re-interpret the tree drawing from the viewpoint of tree psychology. Up to this time the relationship between man and tree has been understood that they are upside down. Namely a man's head, body, and sex organ correspond to a tree's root, trunk, flower and fruits each other. So, the tree test must be interpreted from point of the upside down relationship between man and tree.
In this study E.H.Erikson'model on organ mode, social modality and identity was applied to the analysis of 57 students'tree drawings.

Further the instruction of this test was changed such as “Please draw a fruit tree included root, as well as you can.” And students used the test papers that were framed circularly.

The results of this study were as follows;

⑴ The viewpoint of upside down relationship between man and tree will increase the importance in the interpretation of tree drawing.

⑵ E.H.Erikson's model was very effective in new interpretations of tree drawing.

⑶ To draw a tree in frame of circular contributed to the understanding of identity.

１．はじめに

樹木画法の解釈は、基本的には創始者Koch, K(1949；1970, 林ら訳）が筆跡学と空間象徴論に依拠した仮説に基づいて行われる。Bolander,K(1977;1999、高橋訳)は、Kochと異なった立場から樹木画法の包括的な知見を発表している。樹木全体の構造や根・幹・樹冠など樹木の各部分の描写について詳細な分類を行い、その意味付けを試みている。たとえば、根の描写についての分類や解釈は、Kochより公平で精緻である。

筆者（1996、2000）は、この数年、樹木画の実施法と解釈論に拘り続けており、樹木心理学の視点にたって、人間と樹木のかかわ

＊なかぞの　まさみ　　文教大学人間科学部人間科学科

りの長い歴史から人間と樹木の関係性を捉え直し、その知見を樹木画の新しい解釈論に生かしたいと考えている。

さて、Koch, KがHiltbrunner,H を引き合いに出して、あれほど樹木と人間の本質的な関係性を強調しておきながら、ほとんどこれまで無視されてきている知見がある。それは、思想史的には Platon や Aristoteles 以来主張されているものであり、あるいは宗教・文化史的にいえば、それはさまざまな文化や宗教の中で始原的な形で認められるものでもある。すなわち、Platon 流に言えば、「人間は逆立ちした樹木である」という見方である。Platon によると、樹木は大地に根ざした生物であるが、人間は天から生えた生物である。これに対して Aristoteles 流に言うと、「樹木は逆立ちした人間である」。樹木の根は人間の頭にあたる。樹木は頭を下にし、口すなわち根を大地に突っ込んで養分を吸収する。人間の胴体に相当する幹がその上部に位置し、人間の下半身にある生殖器は、樹木においては花（果実）に相当して、さらに上部に位置する[5]。

また、逆さまの樹木は、ひとつの宇宙樹として初期のインドの聖典であるヴェーダとウパニシャットのなかで、以下のように表現されている。

「根は高く伸び、枝は低く育つこの永遠なるアシュヴァッタ（無花果の木）は、純粋なるもの、ブラフマン（宇宙の最高原理）であり、不死なるものとされ、全世界がそこに宿るのである」[6]。

本論の目的は、樹木画法の解釈の新しい視点として、上記の樹木と人間の倒立した関係性に注目し、ひとつの解釈論を展開させることにある。

2．本　論

(1)　心理学の発達原理からみた樹木と人間の倒立関係

Gesell,Aによると、人の発達の方向は、頭部から足部へ、また、中枢部から末梢部へと進む。この原理を樹木に適用させると、根の部分から幹部へ、そして、幹部から枝葉部へと成長していく。

したがって、この発達や成長の方向の原理から見ても、樹木と人間とは倒立した関係であることが読み取れる。だから、近代科学が未発達であったギリシャ時代の思想家やそれ以前の文明において宗教がすでに明確に把握していたことは、単なる絵空事とみるべきではない。人間と樹木との give and take の親密な長いかかわりのなかで、人間は両者の倒立した本質的関係を理解してきたのであろう。それは現代心理学の知見に矛盾することはない。

(2)　E.H.Erikson の身体部位理論について

筆者は、「樹木は倒立した人間である」という知見に出会った時に、正直に言うと、それはあまりにも幼稚で戯画的な無意味で取るに足りないものという感じと、反対に、未開拓の深遠な隠れた重要な意味が潜んでいる魅力的な感じとが心の中で交錯する一種の ambivalent な感情体験をした。そんな情況の中で、後者の感情を強く前面に押し出し、筆者を鼓舞させてくれた直接のきっかけは、E.H.Erikson のbody zone や organ mode そして、modality についての身体部位論であった。そしてそれを基底にした Identity の議論であった。

Erikson（1950、1963；1977仁科訳）は、「幼児期と社会」の中の脚注で、次のように述べている。

「(私は) mode と body zoneの関係は生物学的、進化論的原理を示すものであると直感した」

「ジュネーブにおける世界保健機構の会合でコンラット・ロレンツが声を大にして次のように述べた。……、私が納得しがたいと思う点は、その図式がわずかの、いやまったくの変更もなしに、陰茎も膣もない動物、また過去においてそれらをもたなかったし、将来ももたないであろう動物

達にも適用されうるのではないかということである。それゆえ、部位理論はたしかにこの種の動物には通用しないが、その図式の原理は通用するものである」(7)。

この Erikson の洞察と Lorenz の慧眼をあわせて吟味すると、Erikson の図式が動物はおろか植物、したがって樹木にもその原理は通用するのではないかというのが、筆者の考えである。

そこで早速、「樹木は倒立した人間である」という人間と樹木の関係性を明確にするために、Erikson の図式を検討してみよう。

まず、樹木の各部分と人間の身体部位の対応関係であるが、それは次の表１のように整理できるであろう。

表１によると、樹木の根部は、人間の頭部に当てはまり、頭部の中で象徴的に重要なのは口唇部位である。つぎに、樹木の幹部は、人間の胴体に当たり、胴体の中で象徴的に重要なのは肛門部である。この肛門部は人間にとっては明確であるが、樹木の幹部に肛門部に相当するところが存在するかどうかは、はなはだ疑問であり、さきに Lorenz がコメントしたように身体部位論は当てはまらないが、その原理は適用される可能性がある。この件については、後で触れる予定である。さらに、樹木の花と果実は、人間の生殖器に相当し、生殖部位は樹木および人間の成熟にとって象徴的に重要である。

表１　樹木・人間・部位理論

樹　木	人　間	部位理論
根	頭	口唇部位
幹	胴体	肛門部位
花・果実	生殖器	生殖部

さらに、Erikson の body zone と organ mode および modality の対応関係は表２のようになる。

表２によると、口唇・感覚部位（樹木では根に相当）は、外界のものを体内に取り入れるというのが、基本的様式である。Erikson によると、取り入れる場合にも受身的取り入れと積極的（攻撃的）取り入れの二つが区別される。前者は、人間の場合、まだ歯が生える以前の乳児が乳を飲む場合が典型的な例であり、後者は、歯が生えてきて固形物を噛み砕いて飲み込む場合がそれに当たる。このような器官の様式は、社会的な行動様式として意味付ければ、外界から与えられたものをそのまま受け取るということで、外界への信頼感・安心感につながっている。次に、肛門・尿道部位（樹木では幹部）は、括約筋の成熟によって排泄物が一定量まで貯まるまでは身体内に保持し、必要以上の量になった時には身体外に排出する。このような器官の様式は、社会的には、自分の意志で保持したり、放出したり内外の状況に合わせて自由にコントロールできるようになることを意味する。すなわち、自分の足で立ち、他者から相対的に自律的になることである。先に問題になったが、樹木には、肛門・尿道に相当する器官が見あたらないが、その器官の様式や社会的様態については、肛門・尿道部位に相当する樹木の幹は、樹木が文字通り「樹立」するためには、中核的な役割を演じていることは、明白である。次の性器部位（樹木では花・果実）では、人間では器官の性差によって当然のことながら、その様式にも差異が生じ、男性の場合は侵入的であり、女性では包含的である。しかし、器官様式には、性差があるもののそれを社会的な文脈の中でみると、外界と積極的にかかわり、やり遂げ、自分のものにすることを意味する。さて、樹木の花や果実は、人間の性器部位に相当するが、器官様式としてはどちらかと言うと女性の包含様式に一致し、

表２　body zone, organ mode, modality

body zone	organ mode	modality
口唇・感覚部位	取り入れ	得る・受けとる
肛門・尿道部位	保持・排出	手放す・掴まえておく
性器部位	侵入・包含	ものにする

その働きを土台にして昆虫や鳥などを取り込み、わがものにしていく中で、成熟した樹木に成長していく。

ところで、これらの身体部位と身体機能の特徴は、Freud の心理・性的発達理論と Erikson の心理・社会的発達理論を連結させ、それが Identity 論へと展開することは、周知のとおりである。しかし、いきなり Identity 論へ跳ぶことをしないで、心理・性的発達論と心理・社会的発達論の関連をおさえた上で、樹木画を解釈する一つの方法を考えてみよう。まず、人格の基本形ともいえる児童期までの心理・性的な発達と心理・社会的発達の側面を見てみよう。

繰り返しの部分もあるが、これまでの議論を整理して、樹木画を解釈する視点として次の表３が役に立つ。

表３で補足しておかなければならないことは、表３の左右両端の関連性である。すなわち、樹木の根、幹、花・果実の部分と心理・社会的危機の対応関係である。

① 樹木の根は、心理・社会的には基本的信頼対不信の状況にどう対処できるかという自我の危機を象徴的に表現する。

② 樹木の幹は、心理・社会的には自律対恥・疑惑の危機を自我がどう対処していくかを象徴的に表現する。

③ 樹木の花・果実は、心理・社会的には自主性対罪悪感の危機を自我が乗り越える様相を象徴的に示してくれる。

以上のようなことを、樹木画の解釈の仮説として採用した時に、樹木画法の理論や臨床的実践にどのように寄与するであろうか。

ここまで論を進めてくると、「樹木は倒立した人間である」という視点からの樹木画解釈の準備がおおまかながら整ったと言えよう。しかし、ここで指摘して置かなければならない点は、筆者と Koch を初めとした従来の樹木画法との違いである。

まず、樹木の根を捉える見方の違いがある。従来の樹木画法によると、樹木画に根が描かれることは少ないし、描かれる場合は病理性の高い事例かあるいは病理性がない場合はいわゆる Jung のいう普遍的無意識の表れという意味合いが強く、描画者の個人的な人格の反映という色彩は薄いという。

それに対して、筆者は、根を強調した教示法による樹木画法を既に提案し、そこで述べたが根にも描画者の個性が投影している可能性があることを指摘した（1996）。本稿では、樹木が倒立した人間であり、根は人間の頭、特に口唇に相当するという立場からすると、根のもつ意味合いはこれまで以上に個人的・人格的な重要性を増すのはあきらかである。心理･性的発達や心理・社会的発達の段階に照らして吟味すると、描かれた根は発達の最初期であるから、無意識的な側面が強く反映されるとは言えようが、だからといって全面的に Jung, C の普遍的無意識の側面を強調するのには慎重でありたいと思う。もちろん、多くの描画の中には Jung 的な解釈が妥当であるものがあるということは、念頭においておかなければならないだろう。たとえば、いずれ筆者も検討することになるであろうが、最初に触れたように逆さまの樹木が、生命樹や宇宙樹としてさまざまな文化や宗教の中に普遍的に見出されることからして、樹木の根を Jung の普遍的無意識の典型（元型）との関連性については検討の余地がある。しかし、本稿では、Jung の視点より、Freud,S

表３　樹木・身体部位・器官様式・心理社会的危機

樹　　木	身 体 部 位	器 官 様 式	心理社会的危機
根	口　唇	取り入れ	基本的信頼 vs 不信
幹	肛　門	保持・排出	自　律 vs 恥・疑惑
花 (果実)	生殖器	侵入・包含	自発性 vs 罪 悪 感

の視点から、逆さまになった樹木は、その根が暗い大地から太陽の光にさらされることであり、このことは Freud の精神分析の言葉で言えば,個人的無意識を意識化するということである。すなわち、樹木の根のありようは、人間でいえば最初の発達段階におけるさまざまな個人の無意識的な体験と対応していると捉えておくことにしたい。

「樹木は倒立した人間である」という観点から描画法を捉えていく時、もう一つ頭に入れておかなければならないことは、樹木を描くときは、普通は、逆さまの樹木は描かないということである。観念やイメージとして思想や宗教の中では、逆さまの樹木が表象されていることは既に述べた通りであるが、特に指示されなければ、通常、逆さまの樹木画は自発的に描かれることはほとんどない。

そこで、細かいことであるが、人間と樹木の倒立した関係性を承認すると、２種類の樹木画法を区別できる。１つは、Platon のいう「人間は逆さまの樹木である」という人間を主語とした表現に明らかなように、人間を中心とした見方であり、その立場に立てば、逆さまの樹木を描くように教示法を改めなければならない。これは、全く新しい樹木画法である。それに対して、もう一つの描画法は、「樹木は倒立した人間である」という樹木を主語とした表現で明らかであるが、樹木中心の Aristoteles の立場である。この立場に立てば、樹木が主語であるから、樹木こそ大地に根ざしたものとしてイメージされ、少なくとも教示法としては、従来の通りでよいことになる。ただし、筆者が既に提案しているように、根を強調した教示に変更する工夫は必要である。

本稿では、これら２種類の描画法のうち後者の立場から、議論を進めていく。

⑶　E.H.Erikson のIdentity 論について

人間と樹木の類似点は、Hiltbrunner のいうように両者とも直立しているということ、その立像にある。「立つ」という姿は、人間や樹木の成長や目標へ向かう多種多様で豊かな想像的内容を喚起させる。すなわち、人間の自立過程にある様々な姿が、様々な樹木の立像と重なり、樹木の立像の中にその人の Identity が写し取られる。

Eriksonには、Identityと「立つ」（stand）ないしは「立ち上がる」（stand up）ということと関連させて考察している個所がある。

人間にとって、「立つこと」の意味について触れたところで、Erikson はギリシャ神話エディプス物語を素材にして、エディプスとは、「腫れた足を持つ男」つまり「この人物のアイデンティティは弱い足という呪いを背負ったもの」であると解釈している。ところでこのエディプスなる神話上の人物は、「朝は四脚、昼は二脚、夕は三脚のものはなにか」というスフィンクスの謎を解いてみせたと言われ、人間の自立（足で立つ）から Identity ということを考察する際に重要な示唆を与える。

ところで、立ち上がること（standing up）や、したがって、目立つこと（standing out）には、体のバランスを失ったり孤立してしまったり、という特別な恐怖が伴う。つまり、人は「直立的であることに伴う不安定さと引き換えに自律性（autonomy）を獲得していく。たとえば、立つことによってはじめて、前方と背後、そして、上方と下方が生じ、それに伴う様々な自我感情、すなわち、前方と関連した恥じらい、後方と関連した疑惑、下方と関連した差別や排他性などが芽生える。これらは立つという身体的不安定さがもたらすものであるが、これらを自我がわが身に引き受けながら、自分の足で立てるように仕向けていかなければならない」。

この人間の自立あるいは自立を可能にしているのは、Erikson によれば、「人は一人で立てるが故に、共に立たねばならない」というパラドックスである。「自立できないから共に立つ」のでもなく、反対に、「自立できたからもはや共に立たない」のでもなく、「自立できるからこそ共に皆で立つ」のである。

青年ルターが、幼児期にはじめて立った時の「僕は立てるんだ」という感激が、やがて、いくつかの危機を経た後、「このためにこそ私は立っている」という自信になり、さらには、「我ここに立つ」という確信へと高まってゆく。ここに青年ルター独自の Identity が確立された。

Erikson の Identity 論は、人は自立するためにも他者や共同体を必要とするが、他者や共同体は自立を脅かす存在でもあるという矛盾を孕んでいる（この項は、西平による）。

さて、樹木の立像が、Erikson の Identity の様相をどのように映し出してくれるであろうか。このことを真正面から取り上げて、樹木画を解釈する方法は現在のところ見当たらない。

以上、人間と樹木の倒立した関係に着目し、新たな樹木画の解釈法の拠り所として、E.H.Erikson の身体部位理論と Identity 論を検討してきた。これまでの議論を整理すると、

① 人間と樹木は倒立した関係にある。

② すなわち、人間の口唇部、肛門部、性器部位は、樹木では、根、幹、花（果実）に相当し、発達と成長はこの順序で進む。

③ これらの発達段階を、社会心理的な危機として捉えると、それぞれ基本的信頼対不信、自律対恥・疑惑、自主性対罪悪感という拮抗した表現で示すことができる。

④ 人間と樹木は、「立つ」というところに共通性があり、直立した姿にその全体像が表現される。

⑤ 「樹立」という表現は、樹木の立像からイメージされたもので、人間の社会心理的な成熟を意味し、人間の Identity を言い表す言葉としても使用される。

⑥ そこで、樹木画の立像は、描画者の Identity を映し出すものと言える。

最後に、これらのことを具体的な資料をもとに少し検討してみたい。

⑷ 大学生の樹木画の例示

１）被験者

Ｂ大学学部生38名および大学院生19名の計57名。

２）実施方法

心理査定の実習の一環として実施した。Ａ４大の画用紙に円枠を施したものと２Ｂの鉛筆を渡し、教示は「根を含めて一本の実のなる木を描いて下さい」とし、描き終えた段階で、「画用紙の空いたところに、今、描いた木を見て連想するものを自由に描いて下さい」と指示した。

３）結　果

① 根について

Bolander, Kによれば、根をみる時は、描き方、根の形、ストローク、構造、根の端に着目すべきことを述べ、それぞれに詳しい分類を試み、その意味付けも行っている。本稿では、描かれた根が、口唇期的な特徴を読み取れるかどうかを確認するのがねらいであるので、根の先端部にだけ注目してみたい。というのは、根の先端は、文字通り「母なる大地」とどのように折り合っているかを鋭く示しているからである。

Bolander にならって、根の先端の特徴をわけると、11種類になるが、今回の結果では表４に示されるように、６種類で分類不能（根を描かないもの）を入れると７種類である。

表４によると、ｂ（先端がくさび型）が13名と一番多く、これは環境（母なる大地）とのかかわりにおいて、与えられたものをそのままの形で受け取ることができずに、少しぎくしゃくした関係が推測される。Erikson のいう攻撃的取り入れが関与しているとも考

表４　根の先端の種類別人数

（単位：人）

a	b	c	d	e	f	不明	計
11	13	4	9	1	11	8	57

えられる。次に多いａ（先細りの根）とｆ（根毛）の11名であるが、どちらも標準的なよくみられるもので、母なる大地との肯定的な関係にあると推測される。特に、根毛を大地に張り巡らすｆの場合は、根と大地が一体化あるいは調和した状況にあり、基本的信頼関係にあることが想定される。次に、ｄ（先端が曲がって、尖っている爪の形）の９名とｃ（先端が曲がって指の形）４名は、母なる大地から十分満足のいく供給が得られていないので、貪欲に欲求を満たそうとする。特に、前者は、その傾向が一段と強まる。なお、ｅ（ひづめ形）の１名は、Bolander によるとまれにしかなく、破壊的で見境のない仕方で欲求を満たそうとするか、魔術的に満たそうとする傾向があるという。この場合も、母なる大地との関係不全を表していると言えよう。最後の、不明８名は、根を描かなかった人であり、ある学生は「根を描くのは恥ずかしい感じがしたので、描かなかった」と後で、事後報告したものがあった。根を描かない理由は、様々であろうが、発達の最初期の無意識的な体験に向かい合うことへの抵抗感があるのかも知れない。その気持ちも当然のことながら、尊重されなければならないだろう。

それぞれの具体例を次に示しておこう（図１）。

②　幹について

幹の形の種類を２本線で垂直に平行線で幹を描いた「平行型」(a)、根元を太く上部にゆくにしたがって先細りになる「先細り型」

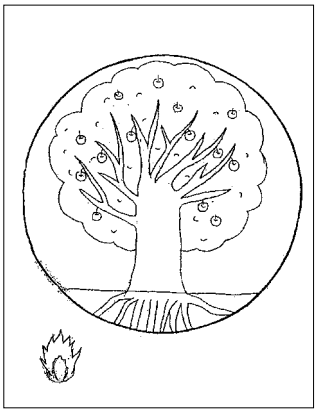

図１：ａ

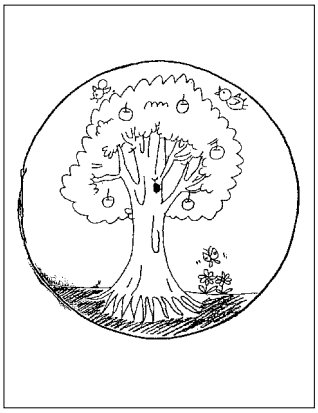

図１：ｂ

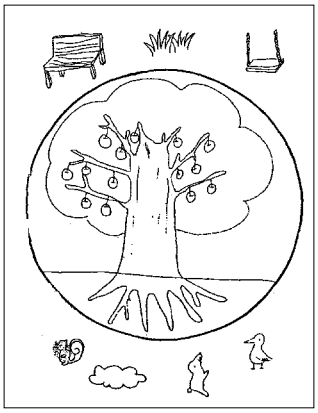

図１：ｃ

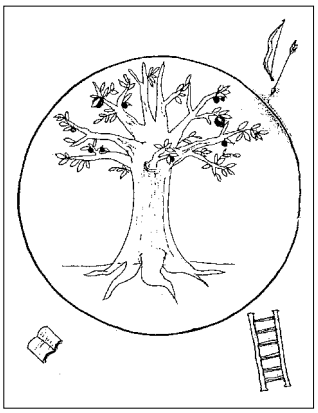

図１：ｄ

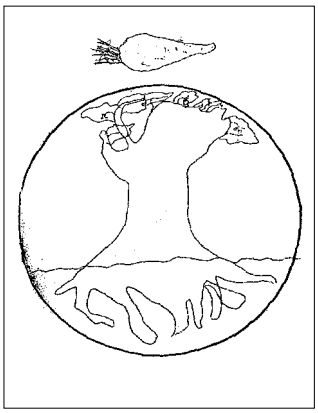

図１：ｅ

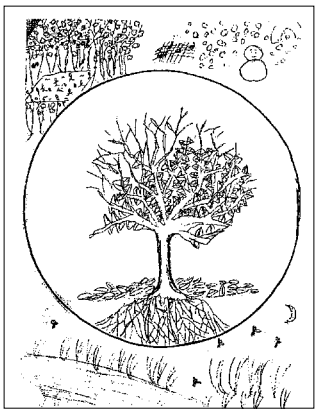

図１：ｆ

（注）図１の記号は、表４の記号と対応している。なお、表４の不明の例は、図４：ｂである。

表５　幹の形の分類別人数

（単位：人）

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	計
5	22	1	19	9	1	57

(b)、上部にゆくにしたがって太くなる「先太型」（ｃ）、根元と樹幹に近い部分が太くなる「中細り型」（ｄ）、幹の中間部に膨らみもある「膨らみ型」(e)、「幹を描かない型」（ｆ）に分類したのが、表５である。

表５によると、頻度の非常に高い「先細り型」（ｂ）22名と「中細り型」（ｄ）19名は、下部から上部へ、上部から下部へのエネルギーや情報の伝達が柔軟におこなわれ、自律的機能が安定していると推測される。しかし、この分類のなかで極端な先細り型が２名認められたが、この場合は口唇期的課題が残されていて、自律的機能が脅かされるところがあると考えられる。次に多い「膨らみ型」（ｅ）９名は、エネルギーや情報などがスムーズに流れず、滞ることも考えられ自律機能が弱められると推測される。特に、表６で示される幹の部分に傷跡などの凹凸がある場合は、自律機能の弱体化が強められよう。次の「並行型」（ａ）５名は、ｂやｄと同じように自律機能は働くが、やや柔軟性に欠けるところがある。今回は１名に過ぎなかった「先太型」（ｃ）は、やや自律機能が過剰に作用している恐れがある。最後の「幹なし型」（ｆ）の１名は、樹木画が真上から見た絵であるので、幹が全く見えない。真上から見た絵は非常に稀であり、そのことだけで興味深く、種種の観点から吟味出来ようが、本稿の主旨から外れるので、その解釈は保留にしておきたい。

以下、それぞれの型について１例ずつ例示しておこう（図２）。

③　幹の表面について

幹の表面は、前後左右、上下において外界とどのように接触するかを見るのに重要であると思われるので、表６のように、幹の輪郭が２本線で描かれているだけの「白紙型」（ａ）、幹に影を付した「影型」（ｂ）、幹の表面に凹凸をつけて描く「凹凸型」（ｃ）、多くの線で幹を塗りつぶす「線型」（ｄ）、「幹のない型」（ｅ）に分類してみた。

表６で、幹の表面を白紙のままにしておく樹木画が19と一番多いが、これは外界との

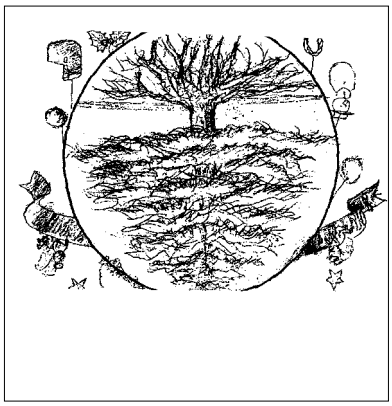

図２：ａ

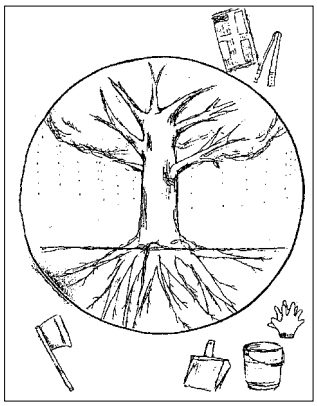

図２：ｂ

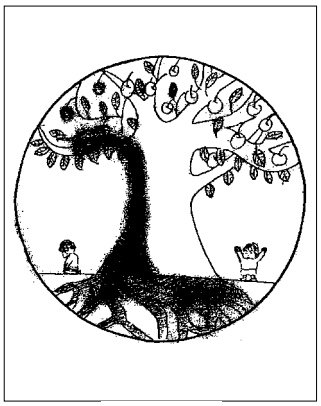

図２：ｄ

(注)　図２の記号は、表５の記号と対応する。なお、表５のｃ、ｅ、ｆは、それぞれ図１：ｄ、図３：ｃ、図４：ｆに対応する。

表６　幹の表面の種類と人数

（単位：人）

白紙	影	凹凸	線	幹無	計
19	16	6	15	1	57

表７　果実の種類別人数

（単位：人）

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	計
15	5	22	1	14	57

かかわりになんの障害もない、良好な状態を示すものと推測される。次に多い幹の表面に影(16名)や線(15名)を描いているのは、外界への過敏さを示し、立つこと（自立）に伴う恥じらい（前方から見られる）や疑惑（後方から見られている）などの感情と関連するものと考えられる。次の凹凸型６名は、外界に対する過敏さは、同じであっても外界に対する態度は非常に頑なで自己防衛的になる傾向を示すと考えられる。

④　花・果実について

花を描いた例はなく、果実についても実のなる木を描くようにとの教示であったにもかかわらず、果実を描かない例が意外に多くみられた（表７）。

表７は、枝にきちんとつながっている「連結型」（ａ）、１本線の枝にぶら下がっている「ぶら下り型」（ｂ）、枝についていない「空中型」（ｃ）、落ちてしまった「落下型」（ｄ）、果実のない「無果実型」（ｅ）に分類された。表７で、一番多い空中型22名は、Bolanderによるとこの描き方はもっぱら女性にみられるというが、今回のデータでは確かに圧倒的に女性に多いが、男性にもみられた。これは、性差以外に、現代は男女共に樹木とのかかわりの経験の不足がこのような現実離れした絵になってしまうようにも考えられる。この空中型の意味付けは、エディプス期の葛藤が未解決でまだ未熟な段階にあることを示唆すると思われる。次に多い連結型の15名は、反対に、エディプス葛藤を一応克服し、成熟した段階にいることを意味する。また、同様に多い無果実型14名は、なんらかの理由でエディプス葛藤の表現を回避しているものと思われる。次に、ぶら下り型５名は、２本線の枝からでた１本線の枝に果実がなるという丁

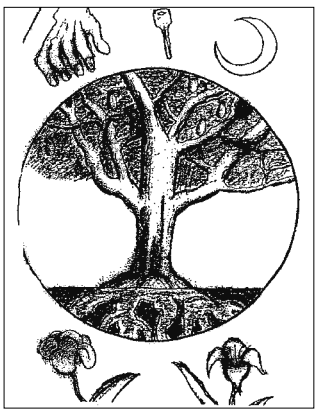

図３：ｂ

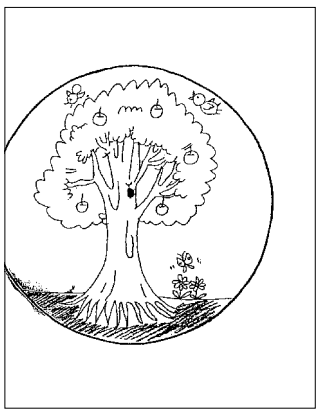

図３：ｃ

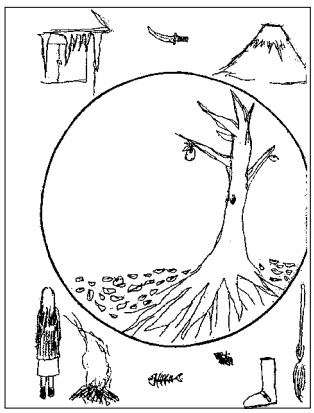

図３：ｄ

(注)　図３の記号は、表７の記号と対応する。なお、表７のａ、ｅは、図１：ｄ、図２：ａに対応する。

寧さであり、じっくり時間をかけエディプス期の葛藤の克服に成功したことを意味すると思われる。最後の落下型１名は、これまでの自己の努力が報われずに、自発性を殺がれ、罪悪感に悩まされる状態が想定される。

以下、それぞれの型について１例ずつ例示しておこう（図３）。

⑤　樹木全体の構造とトーンについて

樹木画において、樹木全体がどのような構造とトーンで描かれているかは、まさに描画者の Identity が映し出されると想定しても間違いではなかろう。そこで、Bolander を参考にして、今回のデータに適合するものを選んで、樹木全体の構造とトーンを分類すると、次の表８のように５種類になる。

表８は、葉っぱのない開いた構造で「冬枯れ型」（ａ）、開いた構造であるが枝は細かい葉におおわれている「夏型」（ｂ）、枝は開かれた構造ではあるが、茂みいっぱい描き最終的には閉じた樹幹になっている「茂み型」（ｃ）、樹幹が雲や花びらのような線で閉じられた「雲型」（ｄ）、１本の連続した線で一筆書きのように閉じた樹幹を描いた「一筆型」（ｅ）、「樹幹なし型」（ｆ）に区別された。

表８で、圧倒的に多かった雲型28名は、外界に関心を示しながらも、自己の内面の方に強い関心が行きがちである。すなわち、集団的 Identity を確立する前に、Personal Identity の確立を志向している段階であると推定される。次に多い夏型９名は、外界への働きかけは活発で、他人とのかかわりの中で自己の立場や位置を明確にする集団的 Identity を確立する段階にあると推定される。次の茂み型７名は、適度に外界との接触を試み、その態度も慎重で控えめなところがあるが、外界からの影響も強くはなく、マイペースで Personal Identity を築いている段階であるといえよう。また、冬枯れ型６名は、外界からの強い影響に翻弄されやすい状況にあり、自己防衛的でそれにも成功していないため、肯定的な Personal　Identity をつくる意欲を喪失している段階である。場合によっては、Negative　Identity 形成に走る可能性も秘めていると思われる。さらに、一筆書き型６名は、かなり内気な傾向をもち、外からの影響を無批判的に取り入れようとし、

表８　樹全体の構造の種類別人数

（単位：人）

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	計
6	9	7	28	6	1	57

図４：ｂ

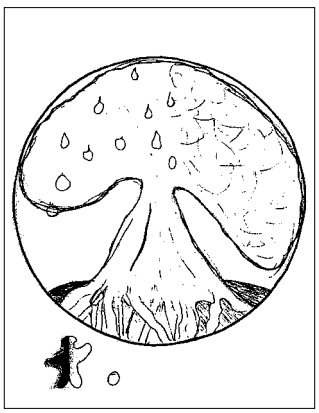

図４：ｅ

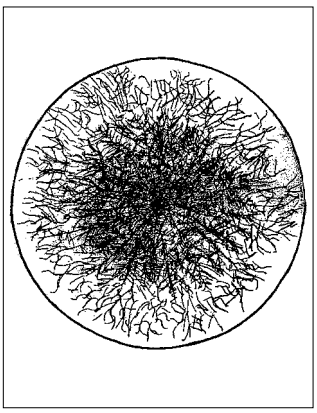

図４：ｆ

(注)　図４の記号は、表８の記号と対応する。なお、表８のａ、ｃ、ｄは、それぞれ図３：ｄ、図３：ｃ、図１：ｂに対応する。

融通性のない硬い Personal Identity を形成することが想定される。

以下、それぞれの型を１つずつ例示しておく（図４）。

⑥　円枠内外の付属描写と Identity との関係について

これまでの描画法において、枠付け法が用いられることがあり、枠の一つの機能は、保護的な性質があることが指摘されている。今回、円枠を採用したのもその意味合いを強調することであった。円枠内外にどのような付加物をどのように描くかをみることによって、Identity 形成の様子を明らかにしてみたい。

表９において、円枠の内外に樹木の周囲に描かれた付加物を分類するとａ～ｈの８種類になる。すなわち、円枠外に枠内の樹木を包み込むような付加物が描かれている「包み型」（ａ）、枠内外に自然物が描かれ樹木と一体化している「一体型」（ｂ）、メルヘン風の付加物が描かれている「メルヘン型」（ｃ）、HTP テストのように家や人などが描かれている「HTP型」（ｄ）、樹木が宇宙の中心であるかのように地球上の様々のものが描かれている「宇宙型」（ｅ）、樹木を支えるものと攻撃するものとが描かれている「アンビヴァレント型」（ｆ）、攻撃的なものが描かれている「攻撃型」（ｇ）、何も描かれない「無付加物型」（ｈ）になる。

表９において、Identity 形成との関係を吟味してみると、包み型（ａ）４名は、周囲からの支えを実感しながら、他者と共に自立を勝ちとっている様子がうかがえる。また、一体型（ｂ）15名は、周囲との摩擦がなく周囲と調和した、平穏な自立過程をたどっているようである。メルヘン型（ｃ）３名は、現実に迎合しないで、夢や願望の充足を願いながら、内的な自立に比重がかかる傾向があるようである。HTP 型（ｄ）14名は、日常的な生活感覚を重視しながら、現実的な自立を目指す傾向がある。宇宙型（ｅ）10名は、包み型（ａ）と対照的であるが、誇大自己的であり、周囲を自己が包み込んでいるという自信家である。アンビヴァレント型（ｆ）６名は、周囲との葛藤関係にあり、周囲は自己を支えてくれたり、攻撃してきたりするので

表９　付加物の種類別人数

（単位：人）

(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)	計
4	15	3	14	10	6	3	2	57

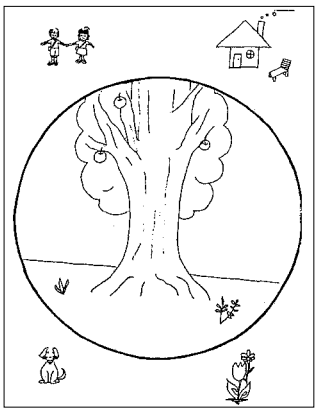

図５：ｄ

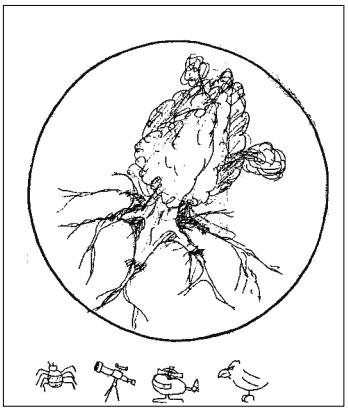

図５：ｇ

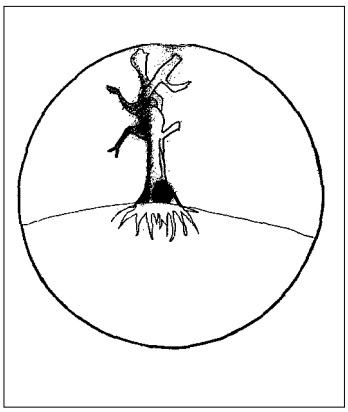

図５：ｈ

(注)　図５の記号は、表９の記号と対応する。なお、表９のａ、ｂ，ｃ，ｅ、ｆは、それぞれ図４：ｂ、図１：ｆ、図２：ａ、図３：ｃ、図３：ｄに対応する。

安閑としていられないようである。攻撃型（g）３名は、周囲からの支えがなく、自立の意欲が削がれているようである。無付加物型(h)２名は、周囲が全く不透明で信頼できないので、自立に関して懐疑的であるようである。

以下、それぞれの種類別に1例ずつ例示しておく（図５）。

３．終わりに

本稿では、樹木と人間は倒立した関係にあるという昔からある知見を樹木画法の解釈に取り入れることを提案し、その可能性と意義について検討した。

① 樹木と人間の倒立した関係を発達心理学的に筋道を通すために、E.H.Erikson の身体部位理論が有効であることを論じた。

② 樹木の根、幹、花・果実は、人間の頭部、胴体、生殖器に相当し、発達の方向が逆さまである。その社会心理的意味を明確にするために、それぞれの部位の機能に対してErikson の社会心理的危機と結びつけて考察した。

③ 人間と樹木において、その共通の本質が直立した姿に反映されるとし、「立つ」ことと Identity との関連を述べた Erikson の議論を取り上げ、樹木全体の立像から描画者の Identity を推測する手立てを模索した。

④ 以上の３つの内容を57名の学生の樹木画で検討した。その際、Bolander, K の包括的な研究を参考にして、根・幹・果実の形態やその分類、そして、樹木全体の構造とその種類などについて吟味したが、その意味付けは、Erikson の Identity 論に依拠した。

⑤ 本稿は、筆者の一連の樹木心理学からのアプローチの一つである。未開拓の分野なので探索的にならざるを得ず、本稿もまだ問題提起の意味合いが強い。今後、数量的な実証的研究と臨床的事例研究の両面からさらに検討を加えていく予定である。

文　献

1. Koch,K、林勝造他訳（1970）バウムテスト．日本文化科学社
2. Bolander,K、高橋依子訳（1999）樹木画によるパーソナリティの理解．ナカニシヤ出版
3. 中園正身（1996）一変法としての樹木画法の研究　根を強調した教示法の導入について．心理臨床研究 Vol.14 No.2 日本心理臨床学会
4. 中園正身 (2000) 樹木画法の研究 ―樹木心理学の視点から― 臨床相談研究所紀要 第４号 文教大学
5. 山下正男 (1994) 思想としての動物と植物．八坂書房
6. ロジャー.クック、植島啓司訳（1995）生命の樹中心のシンボリズム．平凡社
7. Erikson, E.H、仁科弥生訳（1977）幼児期と社会．みすず書房
8. 西平直（1994）エリクソンの人間学．東京大学出版会